HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ブラジル農村部から日本への「デカセギ」：パラ州トメアスーにおける「デカセギ」の諸形態
Author(s)	濱田, 国佑
Description	第2部 アマゾン農村におけるデカセギの過去と現在：トメアスーを事例として
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 26, 49-67
Issue Date	2008-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32556
Type	departmental bulletin paper
File Information	II_P49-67.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ブラジル農村部から日本への「デカセギ」
――パラ州トメアスーにおける「デカセギ」の諸形態――

濱田国佑

第１章　はじめに

日本での就労を目的にして来日する日系ブラジル人の数が、急激に増加するようになってから、すでにかなりの年月が経過している。地方工業都市において急遽立ち現れた「国際化」は、当初、マジョリティである日本人たちに大きなインパクトを与えた。しかしながら、年月の経過とともに、こうした新しい環境に対する「慣れ」も生じてきているように思われる。労働の現場において、あるいは地域社会において、ブラジル人と日本人との間に、どんな形であれ、何らかの関係性が築かれつつある。

ただ、ここに一つの陥穽が存在する。わたしたちは、「ブラジル人と日本人との間の関係性」を考察し、それを記述するという作業を行っているが、こうした認識枠組自体が、「ブラジル人」と「日本人」という２分法を強化し、再生産しているという可能性を、決して否定できないのである。実際、わたしたちが「ブラジル人」について語るとき、特定の「ブラジル人像」だけを前提にする場合が少なくない。例えば、「デカセギ」、「滞在の長期化」、「リピーター」といったキーワードを並べるだけで、容易にある「ブラジル人」を想定することができるだろう。

本稿では、ブラジル・パラ州のトメアスーで行った現地調査の結果を用いながら、国境を越え、日本へ就労に行く人々の多様な現実を描き出すことを試みたい。彼／彼女たちによる語りをここに記すことは、「ブラジル人」という言葉が持つ意味内容を豊富化させることにもつながるだろう。

第２章　先行研究における「デカセギ」の把握

第１節　「デカセギ」の時期区分

まず、「デカセギ」という現象は、これまでどのような枠組みで捉えられてきたのか、ということについて見てみることにする。

森幸一（1995a）は、ブラジル人による「出稼ぎ」の推移を、以下のような３つの時期区分によって把握しようとしている。まず第一期は、1985年から1989年にかけてである。1985年に、初めて「出稼ぎ」の新聞広告がブラジルで掲載された後、1987年ごろから、「出稼ぎ」募集広告が増加し始めたとされる。また、この時期に、人材の積極的なリクルートと送り出しの組織化が行われた。第二期は、1990年から1991年にかけての時期であり、「出稼ぎ『ブーム』期」と名付けられている。こうしたブームをもたらした要因として、「①コロール政権による経済政策の実施、②日本での入管法の改正、③日本での労働力不足の深刻化」（森 1995a: 522）などが指摘されている。第三期は、1992年以降、日本経済が不況に陥る中、「出稼ぎ」者の賃金が減少し、「出稼ぎ」が長期化・反

復化した時期だとされる。こうした中、斡旋業者や出稼ぎ旅行社についても淘汰が行われることになる。

一方、梶田孝道ほか（2005）は、「ブラジル人の移住過程」を６つの時期区分によって捉えている。第一期は、1980年から1984年までの時期であり、少数ながら、戦後ブラジルに移民した一世の帰国（梶田ほか 2005: 6）が行われていた。こうした一世は、「日本への就労斡旋を開始して、デカセギの演出者となった」という点で、重要な意味を持つとされる。第二期は、1985年から1988年までの時期である。この時期に、「デカセギ」斡旋が制度化されることになる。「1980年代前半に就労していた一世の働きぶりを目のあたりにして、日本の雇用者たちはブラジルという新たな労働力貯水池を見いだした」（梶田ほか 2005: 6）のである。また、こうした「デカセギ」を生み出す背景には、ブラジルの経済状況の悪化というプッシュ要因、日本における労働力不足というプル要因も存在していた。第三期は、1989年から1992年までの時期であるとされる。この時期を「決定的に特徴づけるのは、1990年の入管法改正である」（梶田ほか 2005: 7）が、1989年段階で、既に前年比3.5倍増の数字を示している。入管法改正によって、日系三世が「定住者」の資格でデカセギに参入することになったが、その効果が顕著に現れるのは第四期以降であるとされる。第四期は、1993年から1996年までの時期である。この時期の景気後退は、日本で働くブラジル人の労働条件の悪化をもたらした。こうした中で、「非正規雇用に伴う不安定性という十字架を、ブラジル人は集団全体で背負わされ」（梶田ほか 2005: 9）ることになり、「顔の見えない定住化」が進んだとされる。第五期は、1997年から1999年までの時期である。「定住者」資格で在留する三世、または二世の非日系配偶者の数が増え、「日本人の配偶者等」資格で在留する人を上回るのが1998年であり、約10年でデカセギの主役が一世から三世へと交代する「凝縮された移住サイクル」が生じているとされる。また、14歳以下の子どもの割合は、「96年に全体の10％を、98年には３万人を超える」（梶田ほか 2005: 11）までになっている。第六期は、2000年からの時期であり、「ブラジル人問題」が政治化した時期であるとされる。

第２節　トメアスーにおける「デカセギ」

では、トメアスーにおける「デカセギ」については、どのように特徴づけられてきたのだろうか。森（1995b）の研究では、トメアスーからの「デカセギ」開始時期について、以下のような記述が見られる。

> トメ・アスーが属するブラジル北部地方からの出稼ぎは、1987年ごろ、ベレン市近郊のカスタニャールの日系農家から開始されたといわれるが、トメ・アスーからの出稼ぎが開始されたのはさらにその１年後1988年のことであったといわれる。それはトメ・アスー文化協会会長の娘婿（名古屋市で製造業を営む）が経営する会社で人材が不足し、この娘婿が会長を通じて人材の派遣を依頼してきた時であった。その後、1988年下半期よりトメ・アスーからは大挙して日本就労へ出かけるようになったという。（森 1995b: 559）

このように、トメアスーにおける「デカセギ」は、1988年の下半期から始まったという見方がされている。トメアスーの住民がデカセギに向かった理由としては、第一に、1988年下半期にトメア

スーの主産物であった胡椒の価格が暴落し、農業融資の利子返済が難しくなったこと、第二に、胡椒の単一栽培から多角化への転換を行う過渡的な状況の中で、現金収入を確保するために「デカセギ」が選択されたこと、第三に、トメアスーの電化プロジェクトの自己負担金が準備できない世帯があったこと、さらには、子弟教育のための学費準備、治安の悪化という要素も、「デカセギ」の促進条件になったということが指摘されている。

こうした契機を経て、その後、「デカセギ」に行く人は急激に増加することになり、「トメ・アスーからの日本への出稼ぎは、1990年前後よりまさにひとつのブームを形成してきたといってよい」（石川 1995: 587）と評されるまでになったのである。

森（1995b）は、さらに、こうしたトメアスーからの「デカセギ」を、他の日系人集住地からの「デカセギ」と比較した上で、以下のように特徴づけている。

まず、第一に、トメアスーからの「デカセギ」においては、１世の割合が突出して多いというものである。トメアスーでは、戦後の1960年代以降も入植が行われており、こうした戦後移民の存在が、１世による「デカセギ」現象を生み出していたということが指摘されている。

第二は、トメアスーからの「デカセギ」に占める女性の割合が非常に高いという点である。こうした女性たちは、日本で、主に「付き添い家政婦」として働いていたとされる。トメアスーから、多くの女性が「デカセギ」に行くようになった原因としては、①夫が妻や子ども、高齢の親を残して、「デカセギ」にいった場合、治安などの面で不安が生じる、また、②農場の支配人である夫が不在になると、ブラジル人労働者の労務管理などが難しくなる、といった点が指摘されている。

第３章　トメアスーにおける「デカセギ」の発生

トメアスーの住民たちが、初めて「デカセギ」に行った時期はいつ頃のことであり、そしてその期間はどのぐらいであったのだろうか。以下では、「デカセギ」経験者を有する家族に対する聞き取り調査から、その時期を読みとってみることにしよう。

聞き取り調査の中で、家族の中で「デカセギ」を経験したことがある人を尋ねてみたところ、合わせて122人が「デカセギ」経験者として挙げられた。以下の表１は、その「デカセギ」経験者の概要をまとめたものである。

表１　聞き取り調査の対象となった家族における「デカセギ」経験者

家族 No.	個人 No.	続柄	年齢	性別	世代	デカセギ 開始	デカセギ 終了	デカセギ 回数
2	1	本人	30	男性	2 世	1999	2005	3
	2	妻	不明	女性	不明	2000	2005	1
3	3	本人	66	男性	1 世			
	4	妻	54	女性	1 世	1989	1993	3
	5	次男	35	男性	2 世	1993	2005	4
	6	三男	33	男性	2 世	1997	2001	1
7	7	本人	64	女性	1 世	1987	1997	5
	8	夫	不明	男性	1 世	1987	1997	5
	9	長男	不明	男性	2 世	1991	1992	1

9	10	本人	51	男性	2 世	1991	1993	1
	11	弟	不明	男性	2 世	1990	1992	1
	12	弟	不明	男性	2 世	1989	継続中	2
	13	妹	不明	女性	2 世	1990	継続中	2
12	14	本人	29	女性	2 世			
	15	父親	不明	男性	1 世	1994	継続中	3
	16	弟	不明	男性	2 世	1995	継続中	3
	17	兄	不明	男性	2 世	1989	不明	不明
13	18	本人	64	女性	2 世	1990	1995	3
	19	夫	不明	男性	不明	1990	1993	2
	20	長男	不明	男性	不明	2004	継続中	2
14	21	本人	33	女性	非日系	1996	2006	1
	22	夫	不明	男性	不明	1996	2006	1
15	23	本人	35	男性	3 世	1990	1994	3
	24	兄	不明	男性	3 世	1990	継続中	5
16	25	本人	43	男性	2 世	1989	1999	2
	26	妻	不明	女性	不明	1990	1999	2
	27	母親	64	女性	1 世	1990	1997	3
18	28	本人	43	男性	2 世			
	29	妻	不明	女性	不明	2006	継続中	1
19	30	本人	66	女性	1 世	1988	1993	3
20	31	本人	41	男性	2 世	1988	1997	3
	32	母親	不明	女性	1 世	1991	不明	2
	33	妹	不明	女性	2 世	不明	不明	2
	34	妹	不明	女性	2 世	不明	不明	2
21	35	本人	61	女性	2 世	1991	1999	5
	36	次男	不明	男性	3 世	1991	継続中	3
22	37	本人	62	女性	1 世	不明	不明	1
	38	夫	不明	男性	1 世	1997	1998	1
	39	長男	不明	男性	2 世	2006	継続中	1
	40	次男	不明	男性	2 世	2000	継続中	1
	41	四男	不明	男性	2 世	2007	継続中	1
23	42	本人	41	男性	2 世	1990	2000	2
	43	兄	不明	男性	2 世	1994	1995	1
24	44	本人	77	男性	1 世			
	45	次男	不明	男性	2 世	2001	継続中	1
	46	長女	不明	女性	2 世	2004	継続中	1
25	47	本人	63	女性	1 世	1988	2000	1
	48	三女	40	女性	2 世	1989	2004	4
	49	長女	不明	女性	2 世	2005	継続中	1
	50	次女	不明	女性	2 世	1989	継続中	不明
	51	長男	不明	男性	2 世	1990	継続中	不明
	52	次男	不明	男性	2 世	1990	継続中	不明
27	53	本人	47	男性	1 世	1990	1996	1
	54	弟	不明	男性	不明	1988	継続中	1
	55	妹	不明	女性	不明	1991	継続中	1
28	56	本人	69	女性	1 世	1989	1990	1
	57	長男	不明	男性	2 世	1996	1998	1
	58	次男	不明	男性	2 世	1989	継続中	1
	59	長女	不明	女性	2 世	1990	継続中	2
	60	次女	不明	女性	2 世	1989	継続中	1
29	61	本人	65	女性	1 世	不明	不明	8
	62	長男	37	男性	2 世	不明	継続中	不明
	63	長女	35	女性	2 世	不明	継続中	不明
	64	次女	34	女性	2 世	不明	継続中	不明
	65	次男	32	男性	2 世	不明	継続中	不明
	66	三男	29	男性	2 世	不明	継続中	不明
30	67	本人	72	男性	1 世			
	68	妻	64	女性	1 世	1990	1998	7
32	69	本人	70	女性	1 世	1990	1997	3
	70	次男	不明	男性	2 世	1991	継続中	3
33	71	本人	39	女性	3 世	1990	2006	3
	72	夫	不明	男性	2 世	不明	2006	不明
	73	義母	不明	女性	1 世	不明	継続中	不明
	74	義姉	不明	女性	2 世	不明	継続中	不明
	75	義妹	不明	女性	2 世	不明	継続中	不明

34	76	本人	67	男性	1 世	1994	1995	1
	77	妻	不明	女性	不明	不明	不明	不明
	78	長男	不明	男性	2 世	1990	継続中	2
	79	次男	不明	男性	2 世	1990	1992	1
35	80	本人	70	男性	1 世			
	81	妻	70	女性	1 世	1992	1997	1
	82	長男	42	男性	2 世	1992	継続中	2
36	83	本人	54	男性	1 世			
	84	父親	不明	男性	1 世	1990	2000	5
	85	母親	不明	女性	1 世	1990	2000	5
37	86	本人	47	男性	3 世	1989	1995	1
	87	妻	不明	女性	不明	1990	1995	1
	88	兄	不明	男性	3 世	不明	継続中	不明
	89	弟	不明	男性	3 世	1989	不明	不明
	90	弟	不明	男性	3 世	1989	継続中	不明
	91	弟	不明	男性	3 世	1989	継続中	不明
	92	弟	不明	男性	3 世	1989	継続中	不明
39	93	本人	65	女性	1 世	1989	1996	3
	94	長男	40	男性	2 世	1989	継続中	1
	95	次男	38	男性	2 世	1991	継続中	4
41	96	本人	54	女性	1 世	1991	2000	4
	97	母親	75	女性	1 世	1990	1991	1
	98	次男	不明	男性	2 世	1998	継続中	不明
	99	長女	不明	女性	2 世	1999	継続中	不明
42	100	本人	32	男性	2 世	1997	1999	1
	101	父親	不明	男性	1 世	1987	2006	4
	102	兄	不明	男性	2 世	1991	2005	5
	103	義姉	27	女性	2 世	2000	2005	2
	104	妹	不明	女性	2 世	2001	継続中	2
44	105	本人	27	女性	2 世	1998	2007	2
	106	母親	不明	女性	1 世	1989	継続中	不明
	107	兄	30	男性	2 世	1996	継続中	3
	108	妹	26	女性	2 世	2000	2006	1
45	109	本人	41	男性	2 世	1989	1995	1
	110	弟	不明	男性	2 世	1989	継続中	不明
46	111	本人	43	男性	2 世	2003	2007	1
	112	母親	不明	女性	不明	不明	不明	4
48	113	本人	32	男性	3 世	1991	2006	4
50	114	本人	35	女性	2 世	1994	1998	1
	115	母親	65	女性	1 世	1992	1994	1
	116	兄	不明	男性	2 世	1989	1991	1
	117	兄	不明	男性	2 世	2002	継続中	1
51	118	本人	59	女性	1 世	1989	不明	5
	119	夫	57	男性	3 世	1998	2000	1
	120	長男	33	男性	2 世	不明	継続中	不明
	121	次男	31	男性	2 世	不明	継続中	不明
	122	三男	30	男性	2 世	不明	継続中	不明
	123	四男	28	男性	2 世	不明	継続中	不明
53	124	本人	64	女性	1 世	1989	2003	不明
	125	夫	不明	男性	1 世	1999	2003	不明
	126	長女	37	女性	2 世	不明	不明	不明
	127	長男	35	男性	2 世	不明	不明	不明
	128	次男	33	男性	2 世	不明	継続中	不明
	129	次女	31	女性	2 世	不明	不明	不明

それでは、聞き取り調査において言及された、こうした「デカセギ」経験者たちは、いつごろ、「デカセギ」に向かったのだろうか。

以下の表２は、年別のデカセギ開始者数をまとめたものである。これを見ると、トメアスーにおける調査対象家族の中で、最も早い「デカセギ」の事例は、1987年に発生したということがわかる。1987年には、男性２人、女性２人の合計４人が「デカセギ」に出かけている。

No. 7 の家族（家族No. 7 ）は、1987年に、パラ州の州都ベレンにある旅行社の斡旋で日本に出かけたと述べており、既にこの時期には、ベレンの旅行社で「デカセギ」関連業務が行われていたも

のと考えられる。この時、旅行社で「デカセギ」業務を担当していたのは、日系人Oさんであった。森（1995b）の研究では、ブラジル北部地方からの「デカセギ」としては、1987年ごろ、ベレン市近郊の日系農家がその嚆矢であったということが指摘されているが、こうした「デカセギ」の最初期から、旅行社などの企業が「デカセギ」の斡旋に大きな役割を果たしていたと言えるだろう。

この家族は、夫婦で「デカセギ」に行っており、愛知県にある繊維関係の会社で一緒に働いていたと語っている。したがって、トメアスーからの「デカセギ」の特徴の一つであるとされる、「付き添い家政婦」の仕事はしていない。

こうした「付き添い家政婦」の事例が確認されるのは、翌1988年に、「デカセギ」へ出かけた人たちからである。No.30の女性（個人No.30）は、1988年に、女性４人ぐらいで一緒に「デカセギ」に行ったと話している。この女性４人のメンバーは、家族というわけではなく、知り合い同士とのことであった。この「デカセギ」の斡旋をしたのは、やはりベレンの旅行社のOさんであり、初期の「デカセギ」においては、このベレンの旅行社が大きな役割を果たしていたということがわかる。彼女たちは、病院で「付き添い家政婦」の仕事に従事しており、月30万円程度の収入を得ていたと語っている。

1989年になると、「デカセギ」は一気に本格化することになり、男性と女性を合わせて22人が、この年初めて「デカセギ」に出かけている。こうした流れは、その翌年、翌々年も続いており、1989年から1991年の３年間で、合計55人が新たに「デカセギ」で日本へと向かったということがわかる。

しかしながら、1992年になると、この「ブーム」は突然の終焉を迎える。1992年に、新たに「デカセギ」に参入したのはわずかに３人であり、その後、現在に至るまで、「デカセギ」への新規参入者が５人を超えた年は存在しないのである。

表２　年別デカセギ開始者数

年	男性	女性	合計
1987	2	1	3
1988	2	2	4
1989	13	9	22
1990	11	11	22
1991	7	4	11
1992	1	2	3
1993	1	0	1
1994	3	1	4
1995	1	0	1
1996	3	1	4
1997	3	0	3
1998	2	1	3
1999	2	1	3
2000	1	3	4
2001	1	1	2
2002	1	0	1
2003	1	0	1
2004	1	1	2
2005	0	1	1
2006	1	1	2
2007	1	0	1
合　計	58	48	98

このように、調査データを見る限り、1989年から1991年にかけての期間が、トメアスーからの「デカセギ」送り出しのピークであったと言えるだろう。では、なぜ1992年以降、「デギセギ」への新規参入者が激減したのだろうか。ここでは、先行研究における記述から、その背景を探ってみることにしよう。

先に見たように、森（1995a）は、「デカセギ」の時期区分を行う中で、1992年以降の第「Ⅲ期」は、「日本の景気後退期」であったと特徴づけている。それによると、日本の景気後退による求人数の減少により、「出稼ぎ旅行社（斡旋業者を兼ねる）は、Ⅲ期に入ると淘汰されて、３分の１以下に減少しているといわれるまでになった」（森 1995a: 532）ことが指摘されている。こうした状況を受け、「1992年の日本へのブラジル人入国者数は前年比で0.9倍、そして新規入国者数は0.68倍」（森 1995a: 533）になったのである。

こうした状況を考えると、トメアスーからの新規「デカセギ」参入者が減少した背景には、日本における求人数の減少と、それに伴う「デカセギ」業務を行う旅行社の淘汰といった事情が、「デカセギ」労働力の需要側に存在していたように思われる。

実際、トメアスーの「デカセギ」経験者たちに対して、どのような手段で「デカセギ」先を探したかという点を聞いてみたところ、1987年から1991年の間に「デカセギ」に参入した人に関しては、６割が斡旋業者を利用したと答えているのに対し、1992年以降の場合、「デカセギ」に行くにあたって、斡旋業者を利用したと答えた人はわずか１人（7.7%）しか存在しないのである（表３）。このように、1992年以降、「デカセギ」に行く際、斡旋業者を利用するという事例が極めて少なくなっていることがわかる[1)]。

表３　「デカセギ」先を見つけるにあたって利用した手段

		斡旋業者	日本の家族・親族	日本の友人	その他	合　計
デカセギ開始時期	1987～1991年	12	3	1	4	20
		60.0%	15.0%	5.0%	20.0%	100.0%
	1992～2007年	1	7	4	1	13
		7.7%	53.8%	30.8%	7.7%	100.0%
合計		13	10	5	5	33
		39.4%	30.3%	15.2%	15.2%	100.0%

一方、「デカセギ」労働力の供給側には、新規「デカセギ」参入者の減少を促すような動きはそれほど見られない。1990年代の前半、トメアスーにおける農産物の販売は一貫して低迷をしており、「デカセギ」に出かける動機付けが弱まったとは考えられないからである。田中規子（1996）によれば、ピメンタ（胡椒）の価格低迷を受け、トメアスー総合農業組合（CAMTA）は、1990年に熱帯果樹への転換を決議するものの、ピメンタの価格低迷を補うような販売額は得られず、むしろ果樹の加工工場の運営に失敗する結果となり、1994年の７月にCAMTAは経営危機に陥ったとされる。このように、「デカセギ」の供給側には、農業の不振による経済的な危機が存在しており、トメアスーの人々を「デカセギ」へと向かわせる力は、1992年以降も依然として存在したように思われる。

ただ、現実には、1992年以降「デカセギ」への新規参入者は大幅に減少している。供給側の要因を挙げるとすれば、「デカセギ」を希望する人の大半が、すでにこの時点で「デカセギ」に参入していたということが、影響をあたえていたのかもしれない。森（1995a）は、1992年５月に発行されたトメアスー文化協会による「日系人動態調査表」のデータから、トメアスーの日系人人口1,323人のうち、日本へ就労している人は336人に上っており、これは1世帯あたりにすると、約1.29人になるということを指摘している。このように、1992年の段階では、各世帯から１人以上が既に「デカセギ」へ出かけていたということを考えれば、更なる「デカセギ」への参入を可能にするような人的余裕が、各世帯において既に残っていなかったということも、十分に予想される。

第４章　トメアスーにおける「デカセギ」の諸形態

以上で見たように、1989年から1991年にかけてピークを迎えた、トメアスーにおける「デカセギ」への新規参入者は、1992年以降大幅に減少し、落ち着きを取り戻したかのように見える。それでは、こうした「デカセギ」参入者たちは、その後どのような「デカセギ」経験をし、現在どのような状況にあるのだろうか。

以下の表４は、トメアスーから「デカセギ」に行った人たちが、現在もなお「デカセギ」を継続しているのか、それとも、帰国をしているのかということについて、その性別、および世代ごとにまとめたものである。これを見ると、男性の場合、約半数がまだ「デカセギ」を継続している状況にあるのに対して、女性は、約７割がブラジルへ帰国しているという状況である。また、世代別に見ると、１世は、男性、女性ともに、約９割が「デカセギ」から帰国しているのに対し、２世や３世では、未だ「デカセギ」を継続しているという人の割合の方が高くなっている。

このように、トメアスーにおける「デカセギ」と一口に言っても、世代や性別によって、そのあり方は大きく異なっていることがわかる。そこで、以下では、世代、性別、あるいは「デカセギ」継続状況などによって異なる「デカセギ」の諸形態を描き出すことにしたい。

表４　「デカセギ」の継続状況

性別	世代	継続中	帰国	合計
男性	１世	1	7	8
		12.5%	87.5%	100.0%
	２世	26	20	46
		56.5%	43.5%	100.0%
	３世	6	5	11
		54.5%	45.5%	100.0%
	合　計	33	32	65
		50.8%	49.2%	100.0%
女性	１世	2	19	21
		9.5%	90.5%	100.0%
	２世	12	11	23
		52.2%	47.8%	100.0%
	３世	0	1	1
		0.0%	100.0%	100.0%
	非日系	0	1	1
		0.0%	100.0%	100.0%
	合　計	14	32	46
		30.4%	69.6%	100.0%

第１節　１世の女性による「デカセギ」

石川雅典（1995）が指摘しているように、一世の女性による「デカセギ」は、トメアスーにおいて特徴的な事例であると言える。先ほど見たように、1988年には、女性４人が誘い合わせて、「デカセギ」に出かけたという事例が見られる。こうした人たちが日本で従事していたのが、病院における「付き添い家政婦」の仕事である。

収入は、ほぼ全員が、手取りで月30万円以上を得ていたと答えている。中には、病院で昼夜問わず付き添いの仕事をした結果、月に50万円以上の収入を得たと答える人もいる。No.61（個人No.61）の女性は、以下のように語っている。

あのころは、１日21,000円。１日も休まないで働いた。ただ、そこからいくらか天引きがある。税金も相当取られた。でも、55万円くらいは手にした。

ただ、この女性の場合、「付き添い家政婦」という職業を見つける際の経路が、他の「デカセギ」経験者とは異なっており、このことが、他の人と比較した場合の、相対的な高収入につながっている可能性が存在する。就職口を見つける際の事情については、以下のように語っている。

ふつうは、先輩が行ったところに行った。私は、誰とも行かなかった。家が、東京の大森の近くだった。学校もその辺だったから、よく知っている。大森の駅前に家政婦紹介所があって、そこに行ったら「ここに行きなさい」ということで紹介された。日本語も困らないので、ブラジルから来たなんていう余計なことはいわなかった。みんなほとんどは、渋谷にある同じ病院に行った。女の人はみんな同じところに行って、助け合って働いていた。

このように、No.61の女性に関しては、トメアスー出身者がよく行っていた渋谷の病院では働かず、自ら就職口を見つけていたのである。また、その際には、ブラジルから来たということは言わずに、職探しをしたということが語られている。こうしたことを考えると、同じ「付き添い」という仕事でも、「日本人」に対する労働市場と、「日本人ではあるがブラジルから来た人」に対する労働市場とが、分断されていたという可能性が存在するのではないだろうか[2)]。

それでは、こうした女性たちは、なぜ「デカセギ」に行こうとしたのだろうか。以下では、「デカセギ」経験者の語りから、その理由を探ってみることにする。1988年に、女性４人が誘いあわせて「デカセギ」に出かけていることからもわかるように、トメアスーにおいて、１世の女性による「デカセギ」は、一種の流行となっていた。経験者の語りでも、「デカセギ」の理由として多く挙げられていたのは、「みんなが行っていたので」というものである。

例えば、「デカセギ」への新規参入ブームの最盛期を過ぎた、1992年に、初めて「デカセギ」に行った女性（個人No.115）は、以下のように語っている。

日本に行く前の仕事は農業。農業は順調だった。友達がどんどんどんどん日本へ行ってね。行かないと遅れちゃうみたいな。帰ってきた友達から日本の話をきいて。友達はほとんどが病院で働いていた。日本に行こうと誘われた。３人で行った。

このように、家業である農業は「順調だった」にもかかわらず、友だちがどんどん日本に行き、「デカセギ」に行っておかないと「遅れちゃう」という理由で、「デカセギ」による日本での就労が選択されているのである。

もちろん、こうした「デカセギ」経験者たちの語りの背後に、経済的な理由が全く存在しないとは言えないだろう。先に見たように、1990年代の前半、トメアスーにおける農業は、非常に厳しい状況に置かれていた。こうした時期に、「デカセギ」による現金収入が得られるということは、やはり大きな魅力であったと言えるだろう。

また、森（1995a）が指摘するように、１世の間では、当初「『出稼ぎ』という語彙のもつ『食い詰め者』『暗さ』『恥ずかしさ』『貧乏』などのイメージが日本への就労帰国の大きな抵抗感」（森

1995a: 516）となっており、こうしたマイナスイメージを転換していく戦略として、友だち同士による、日本見聞のための「デカセギ」という理由が積極的に採用されたということも考えられる。

ただ、いずれにせよ、女性たちが日本に「デカセギ」に行く際に、その友人ネットワークが活用されたこと、そしてそれが、「デカセギ」への契機の一つとなっていたことは間違いないだろう。No. 4の女性（個人No. 4）が、「デカセギには、ひとりっていうのはあれだったので、いつも友達と一緒に」と語っていることからも、友人関係のネットワークが、「デカセギ」への参入に際し、大きな影響を与えていたことがうかがえる。

こうした1世の女性による「デカセギ」は、どのような形で終了したのだろうか。先に見たように、1世の女性は、すでに約9割が帰国しており、日本に残っているのは2名だけである。以下の表は、1世の女性が「デカセギ」を終了した時期を示したものである。これによると、1997年頃に、比較的多くの人が「デカセギ」から帰国していることがわかる。

こうした事態が生じた背景には、1994年に健康保険法が改正され、1世の女性たちが主に従事していた病院での「付添看護」の解消が目指されたという制度的な動きが存在しているものと考えられる。この法改正の結果、「付添看護」は原則として1996年3月をもって解消し、さらにその後、最長1年半の経過措置期間が終了するまでには、完全に「付添看護」の解消が目指されることになった。1997年に、4名が「デカセギ」から帰国しているのは、こうした動きと無関係ではないだろう。

また、1世の帰国については、本人の年齢という要素が影響を与えている可能性も高い。2007年現在、「デカセギ」を経験した1世の女性の平均年齢は64.29歳に達している。「付添看護」の仕事がなくなったという事情とともに、年齢的な問題が、「デカセギ」の継続を断念させたという可能性は高いと言える。

表5　1世の女性の帰国年

年	度数
1990	1
1991	1
1992	0
1993	2
1994	1
1995	0
1996	1
1997	4
1998	1
1999	0
2000	3
2001	0
2002	0
2003	1
2004	0
2005	0
2006	0
継続中	2
帰国年不明	4
合　計	21

第2節　1世の男性による「デカセギ」

戦後トメアスーに入植した一世の多くは、「デカセギ」への新規参入がピークに達していた頃、40歳代の後半を迎えており、各世帯において農場の経営者としての仕事を担うようになっていたと言える。こうした中、農場の経営を妻などに任せて、「デカセギ」に向かうという選択をすることはなかなか容易ではない。

森（1995b）が指摘しているように、トメアスーの農家では、ほとんどの世帯で農作業を行う労働者が雇用されており、労働者に対して、作業の指示などを適切に行うことが重要になる。しかしながら、農場の経営者として、こうした業務を引き受けてきた男性が不在になった場合、雇用した労働者に対する監督をしながら、円滑に農作業を続けることは難しくなるのである。そのため、農場の経営者としての役割を持つ男性は、トメアスーに留まらざるを得ず、女性による「デカセギ」が他の地域と比べて多くなったということが指摘されている。

それでは、こうした状況においても、「デカセギ」に行くということを選択した１世の男性たちは、どのような理由で、そしてどのような形で「デカセギ」を行っていたのだろうか。

１世の男性で、一番早く「デカセギ」に出かけたのは、No.８の男性（個人No.８）である。先に見たように、この家族は、夫婦で揃って「デカセギ」に行くという決断をしている。約10年の「デカセギ」を経て、現在は、２人ともトメアスーに戻っている。夫婦が「デカセギ」に行った1987年当時、一人息子である長男がブラジルに残ってはいたものの、まだ18歳であり大学に通っていた。その後、1991年から1992年にかけては、この長男も「デカセギ」に行っており、少なくとも1987年から1992年の間は、家族の中で農業を手がける人がいなかったということになる。

このような夫婦揃っての「デカセギ」ではあったが、あくまでも日本での滞在は、一時的なものとして捉えており、目的意識もはっきりしていたということが妻である女性から語られている。「日本で暮らそうとは思わなかった」、「長く住むつもりはなかった」ので、日本での生活はできるだけ節約を心がけ、電話もひかなかったとしている。また、他の「デカセギ」者との交流についても、「労働者階級だな」という風に見てしまい、「関わらないようにした」と語っている。

この家族では、1987年当時、現金収入を得るために「デカセギ」が選択されたが、「デカセギ」を振り返ってみて、以下のような評価をしている。

> デカセギで農業がだめになってしまう。土地を管理してもらえるならいいが。ただお金をもってくるだけでは無意味。お金があっても一から出直し。

No.84の男性（個人No.84）は、1990年に、妻とともに「デカセギ」に出かけている。ただ、この家族の場合、1990年の段階で、すでに息子が37歳になっており、農業の中心的な担い手となっていたという点が、先の事例とは大きく異なっている。もともと、この家族では、37歳の息子の方が「デカセギ」に行くことを検討していたが、息子が「デカセギ」に行った後、とても自分たちでは農場を維持できないということで、「どうせ行くなら自分たちが行く」という話になったということが、息子であるNo.83の男性（個人No.83）から語られている。当時、お金に不自由をしていたというわけではなく、「ブーム」だったから、ということが理由として挙げられている。この夫婦は、東京の八王子で、アパートの管理人として約10年働いた後、2000年にトメアスーに戻っている。

以上の事例は、比較的長期間にわたる「デカセギ」であるが、１世の男性による「デカセギ」の多くは、やはり短期間にとどまっている。

例えば、No.38の男性（個人No.38）は、1997年から1998年までの約１年間、「デカセギ」に行っているが、そのきっかけは、日本にいる親が病気になったということであった。日本で働きながら、週末は親の看病をするという生活を約１年間続けたが、親が亡くなったため、葬儀を行って帰って

きたと、妻であるNo.37の女性（個人No.37）は語っている。

また、No.36の男性（個人No.36）も、1994年から１年間「デカセギ」に行っているが、その際のきっかけは、トメアスー総合農業組合（CAMTA）の理事を辞め、公職から退いたことであった。「変わった日本を見てみたい」と思ったこと、また、妻が「デカセギ」で既に日本に滞在していたこともあって、「デカセギ」に行くことにしたと語っている。

このように、１世の男性による「デカセギ」を見ると、やはり、農業の第一線を退き、息子などがその跡を継いでいる場合に、「デカセギ」が行われるという傾向が見受けられる。No.７の家族（家族No.７）のように、それまで行っていた農業を中断して「デカセギ」に行くという場合は、あまり確認されなかった。ただ、完全に農業を辞めて、日本に移住した家族も少なからず存在すると考えられるので、こうした家族の状況を、いかにして把握するかということが今後の課題になると言えるだろう。

第３節　２世・３世による「デカセギ」――「デカセギ」を継続する人

第１節、および第２節では、トメアスーにおいて、１世による「デカセギ」がどのように行われたかという点について、「デカセギ」経験者による語りを材料にして考察を加えてきた。それでは、２世・３世によるデカセギは、どのような形態として特徴づけることができるのだろうか。

ここではまず、「デカセギ」から現段階では帰国しておらず、そのまま「デカセギ」を続けている人について、取り上げることにする。前掲の表４で見たように、「デカセギ」に行った２世の男性の中で、トメアスーに帰ってきている人の割合は43.5％にとどまっており、56.5％が、2007年現在においても、依然として「デカセギ」を継続している。３世についても同様であり、過半数の人が、やはり「デカセギ」を継続している。

このような人たちは、どのくらいの期間にわたって「デカセギ」を続けているのだろうか。以下の表６は、２世、および３世の「デカセギ」継続者が、どのくらいの期間にわたって「デカセギ」を続けているかということをまとめたものである。これを見ると、デカセギ継続期間が16年、17年、18年に及んでいるという人の割合は、あわせて58.1％に達しており、「デカセギ」の「長期化」が進んでいるということがわかる。

表６　２世・３世の「デカセギ」継続者の「デカセギ」期間

	度数	パーセント
１年未満	1	3.2%
１年	1	3.2%
２年	1	3.2%
３年	1	3.2%
４年	0	0.0%
５年	1	3.2%
６年	2	6.5%
７年	1	3.2%
８年	1	3.2%
９年	1	3.2%
10年	0	0.0%
11年	1	3.2%
12年	1	3.2%
13年	0	0.0%
14年	0	0.0%
15年	1	3.2%
16年	3	9.7%
17年	9	29.0%
18年	6	19.4%
合計	31	100.0%

家族の多くが、長期間「デカセギ」に行っている例としては、まず、No.37の家族（家族No.37）を挙げることができる。現在トメアスーに戻ってきている男性（個人No.86）によれば、この家族は８人兄弟であったが、弟が「デカセギ」に行きたいと言いだしたため、No.86の男性を含めた兄弟５人で、1989年に日本に向かったと語っている。その後、この男性と弟１人（個人No.89）は帰国したものの、その他の３人は帰国せず現在に至っている。また、兄であるNo.88の男性（個人No.88）が、新たに「デカセギ」に参入したため、８人兄弟のうち、現在４人が日本にいるという状況になっている。No.86の男性は、日本に残った弟たちについて、以下のように語っている。

もう、帰ってこないのではないか。子どもたちも、学校に行っているし。子どもたちが学校に行きだしたら駄目。もう、帰ってこない。

このように、この男性は、弟たちがトメアスーに帰ってくる可能性は低いと考えている。ただ、弟たちにとっては、帰ろうと思っても帰る条件がないという事情もまた、存在するように思われる。この家族は、約300ヘクタールの農地を持つ農家を営んでいるが、既にNo.86の男性が、後継ぎとしてトメアスーに帰っている。また、現地のブラジル人労働者を雇っているため、農作業に必要な労働力も確保されているのである。実際、ブラジルにいる他の兄弟も農業に従事してはおらず、会社員をしたり、レストランを経営したりしている。現在、一番下の弟のみが、男性と一緒に同居しているという状況である。このように、既に兄弟の一人が農業を継いでいる状況の中、農業以外の産業が発達しているとは言えないトメアスーに戻ることは、それほど容易なことではないのである。

また、上記のような大規模農家ではなく、農地面積が100ヘクタールに満たないような比較的小規模な農家では、後継ぎとして農業を続けるという選択をする子どもが、一人もいない場合も多い。この場合、子どもたちは、必然的に他の職業で生計を立てることになる。そうした際、「デカセギ」に行くことは、最も身近な選択肢の一つになっていると言える。No.29の家族（家族No.29）では、子どもたち全員が「デカセギ」に行っており、両親だけが、トメアスーに残って農業を続けているという状況である。母親の女性（個人No.61）は、以下のように語っている。

対象者：うちは、そんなに大きくない。ピメンタが少ししかとれない。農場は、ピメンタとカカオとクプアスー。
調査者：どのくらいの面積ですか？
対象者：３耕地。
調査者：１耕地はどのくらい？
対象者：25町歩。
調査者：じゃあ75町歩はあるわけだ。日本に比べたら、ずいぶん大きい。
対象者：でも、経費がかかってしょうがない。無駄を省いているが、儲からない。
調査者：もう少し小さくしては？
対象者：だから、家の周りで野菜をつくっている。これは、街で全部売れる。農場で労働者を何十人使っても、計算すると（採算が）合わない。これの方が、よほどいい。
調査者：ブラジルでやっているのと違うことをやるといいのかもしれない。後継ぎは？
対象者：継ぎたくないのでは。やりたいという人もいない。

No.53の家族（家族No.53）も、後継ぎがいない。農地の面積は、約70ヘクタールである。子どもたちは、全員「デカセギ」を経験しているが、現在も「デカセギ」を続けているのは次男の１人だけである。他の３人の子どもは、ブラジルに帰ってきてはいるものの、いずれも農業を継ぐことはなかった。長男はクリチーバでサラリーマンをしており、長女は、大学で学んだリハビリテーションの技術を生かして、サンパウロで診療所を開設している。次女は、医学部を卒業して医師になっており、トメアスー近辺で診療所を開設している。

このように、子どもたちが農業を継がず、別の職業に就く場合も多い。その際に、選択される「デカセギ」は、もはや一時的に家を離れて、お金を稼ぐという意味の「出稼ぎ」ではない。将来の人生を考え、日本での生活を選択したと言っても良いのかもしれない。

親たち自身が、農業にそれほどの希望を見いだしていない場合は、日本に行くという子どもたちのこうした選択も比較的許容されやすいが、子どもにも、出来るだけトメアスーで農業を続けて欲しいという強い希望を持つ親も存在する。No.24の家族（家族No.24）では、次男（個人No.45）が2001年から「デカセギ」に行っているが、帰ってきて農業をして欲しいという希望が、父親であるNo.44の男性（個人No.44）によって語られている。

> 今、次男は、家族で日本にいる。お金を工面して、次男を送り出してやれば良かったんだけど、自分は、デカセギというものが嫌いだったので。次男は、岐阜の方の工場で働いている。結婚相手は、台湾の人だと聞いている。日本で知り合ったのだろう。おそらく次男は帰ってこないだろう。４耕地（100町歩）を次男の名義で買っている。日本でうまくいかなかったら、帰ってきて百姓をやる可能性もわずかながらある。自分としてはやってもらいたい。

以上のような事例では、比較的長い間「デカセギ」が継続しており、トメアスーに残っている家族も、帰国する可能性は小さいということをある程度意識している。こうした２世・３世たちは、今後、日本で生活していく可能性は高いと言えるだろう。

ただ、一方で「デカセギ」を継続している２世・３世の中には、事業資金を稼ぐというある程度明確な目的を持って、「デカセギ」に行っているという人も存在する。No.35の家族（家族No.35）では、長男が農業資金を稼ぐため、４年間の予定で「デカセギ」に行ったことが、父親であるNo.80の男性（個人No.80）によって、以下のように語られている。

> 息子は、事情があって、去年の５月からデカセギに行っている。息子は、自分の耕地に、パームを植えた。苗と植え付けの経費は、油を絞る会社が、生産物担保で無利息で貸してくれる。生産が上がったら、生産物でそれを払う契約。植え付けた後、取れるまで、４年以上かかる。４年間は自己資金で管理しなければいけない。管理資金が必要なので、日本へ行っている。実際には、農業は、息子が継いでやっていたんだけど、資金繰りのためにデカセギに行っている。その間、管理をすることになった。

第４節　２世・３世による「デカセギ」――トメアスーに帰ってきた人

第３節の最後の事例で見たように、「デカセギ」を継続している人の中には、一定の期間で事業資金を稼ぎ、早期の帰国を目指している人が存在していた。それでは、トメアスーに帰ってきた帰

国者たちは、当初の予定通り、お金を稼いで帰国をしたのだろうか。それとも、別の理由で、帰国をすることになったのだろうか。以下では、トメアスーの２世・３世たちが、いかにして「デカセギ」から帰国したかということを、「デカセギ」経験者の語りから明らかにしていくことにする。

「デカセギ」から帰国した２世・３世の語りを検討してみると、まず、農家の後継ぎとして、いずれトメアスーに帰ることを強く意識しながら、「デカセギ」に行っていた人の存在を指摘することができる。先に見たように、No.37の家族（家族No.37）では、家族の多くが「デカセギ」に行った経験を持っており、現在でも８人兄弟のうち、半数の４人が「デカセギ」を続けている。こうした中、次男であるNo.89の男性（個人No.89）は、後継ぎとして農業をするために、いずれ帰国するというつもりで「デカセギ」に行っていたと語っている。

> デカセギは、自分にとっては非常に良かった。勉強になった。自分の場合、いずれはブラジルに戻らなければならないという覚悟で、日本に行った。ブラジルに、両親がいたので。兄貴は、若いときに家を飛び出していたので、自分が後継ぎをやらないといけないし。あとは、やっぱりトメアスーが好きだという気持ちがある。いずれ帰らないといけないという気持ちは、持っていた。経験を積んで満足したら、帰ろうと思っていた。

上記の事例では、後継ぎとして農業をするという明確な予定が存在していたために、将来帰国するという意識が強く保持されていた。ただ、これほど明確な予定が存在しなくとも、トメアスーに戻りたいという意思を持っていた人は多い。

例えば、No.23の男性（個人No.23）の場合、家族は農業を営んではおらず、後継ぎというわけではなかったが、「デカセギ」に行くのは、独身の時だけという意識を持っていた。1994年に帰国し、「デカセギ」で得た資金をもとに、現在は、トメアスーでホテルを経営している。今後の「デカセギ」についても、結婚して家族がいるので、行くつもりはないと語っている。

また、No.109の男性（個人No.109）も、子どもをトメアスーで育てたいと考え、「デカセギ」から戻ってきた。日本に滞在している間、トメアスーに帰るという気持ちは、いつも持っていたと語っている。

> 弟がどうしてもデカセギに行きたいと言っていたので、長男がぼくに相談して、一緒に行かないかと言われた。デカセギは１回だけ。1989年から1995年まで。デカセギには、弟と一緒に行った。日本では、群馬の愛知車輌という会社で、塗装の仕事をやっていた。弟は、溶接の仕事をしていた。手取りで、48万円ぐらい貰っていた。残業もして。日曜日は休んでいたけど。１日14時間ぐらい働いていた。弟と一緒に住んでいた。向こうで結婚して、弟と別々に暮らすようになった。こっちで知り合って、もともと友だちだったけど、向こうで付き合うようになった。向こうもトメアスー出身。日本に行って、４年ぐらいたったとき、結婚した。子どもは、こちらに帰ってきて、生まれた。妊娠２ヶ月ぐらいのときに、帰ってきた。トメアスーで子どもを育てようと思って。日本に仕事に行ってたけど、帰る気持ちはいつも持っていた。

このように、トメアスーで暮らしたいという気持ちを持つ人は多い（表７）。２世・３世の「デカセギ」帰国者に対して、将来どこに住みたいかということを聞いてみたところ、17人中16人が、トメアスーで暮らしたいと答えている。トメアスー以外のブラジルと答えた人が、わずかに１人いただけで、それ以外はトメアスーで暮らしたいと考えているのである。

表７　将来住みたい場所（２世・３世）

	度数	パーセント
トメアスー	16	94.1%
トメアスー以外のブラジル	1	5.9%
日本	0	0.0%
日本とブラジル以外の国	0	0.0%
合　計	17	100.0%

トメアスーという故郷への愛着が、多くの人によって語られる一方で、将来を見据えた戦略の一環として、帰国が選択されるという場合も存在する。No.42の男性（個人No.42）は、トメアスーへ帰ってくることにした理由を以下のように語っている。

> 2000年に帰ってきた。日本では、いろんな仕事をして、日本で暮らしても良いなと思ったけど。未練もあったのかもしれない。どっちでもよかったんだけど。妻とは、日本で知り合った。結局、一緒に帰ってきた。
>
> こっちに帰ってきて何かをやりたいという気持ちをもって行かないと、迷ってしまう。あっちの生活に慣れてしまう。こっちに帰ってくるという気持ちがなくなる。若い人はほとんどそう。あっちの生活は、ここととは違う。１年２年は、帰ってきて何かしようという気持ちを持っているが、それを過ぎてしまうと、もうこっちでもいいかなという気持ちになってしまう。帰ってこようと思った理由は、ちょうどピメンタの景気もよかったし、今帰ったらもっと農業をもっとのばせるのではないかと思った。胡椒の値段が出てなかったら、日本にいたままだったかもしれない。兄も一人で大変だったし。

この男性は、1990年に「デカセギ」に行ってから、約10年を日本で過ごしている。「デカセギ」の期間が長くなる中で、日本の生活にも慣れ、日本で暮らしてもいいと思いはじめていたが、ピメンタの値段が上がり、今帰国したら農業を伸ばせるかもしれないという考えを持ち、帰国を決断したと語っている。また、胡椒（ピメンタ）の値段が上がっていなければ、帰国しなかったかもしれないとも語っている。

第５章　農村から「デカセギ」に行くということ

第４章第４節では、「デカセギ」に行った２世・３世が、なぜトメアスーに帰ってきたのかという理由を取り上げた。その中で、帰国した２世・３世たちのほとんどが、将来もトメアスーに住みたいという考えを持っているということが明らかになった。つまり、こうした人々は、程度の差はあっても、基本的にはトメアスーでの生活を嫌っていない人たちであると言える。

ここでは、こうしたトメアスー出身の２世・３世たちを、「農村型」の２世・３世として、都市部で給与を得ている、あるいは専門的職業に従事している「都市型」の２世・３世と対比させた形で、特徴づけてみることにしたい。ここで言う「農村型」の２世・３世とは、農村において農業や自営業といった職業に従事し、それが生活の基盤となっている人々のことである。こうした人々は、身体を使った労働に対して、親和的な文化を持っていると言えるだろう。一方、「都市型」の２世・３世とは、取得した学歴などを文化資本として活用しながら、専門的職業や管理的職業に従事し、社会的地位の上昇を図っていこうとする人々である。こうした人々にとっては、学歴を生かした専門的・管理的職業こそが「本来の仕事」であり、「デカセギ」労働に対しては、それほど親和的であるとは言えない[3)]。

もちろん、こうした区分は、絶対的なものではない。先に見たように、トメアスーで農家を営む１世の女性（個人No.７）は、「デカセギ」に行っている間、他の「デカセギ」労働者を、どうしても「労働者階級だな」という風に見てしまい、交流を持たないようにしたと語っている。つまり、トメアスーで農業を営んでいても、都市的な価値観を持っている場合もあるのである。実際、この女性の娘は大学を出て、ベレンで専門的職業に従事しており、都市的な価値観に対して親和的な家族であると言えるだろう。

「農村型」であるトメアスーの日系人たちの特徴としては、身体を使った労働を厭わず、「よく働く」という点をまず挙げることができる。「働き者」であるという特性は、調査における多くの語りからうかがうことができる。特に、戦後移住をしてきた１世は、農業をやりたいと考えてトメアスーに来た人が多く、農業をするということ、ひいては働くということに対する愛着が感じられる。1963年にトメアスーへ移住したNo.44の男性（個人No.44）は、以下のように語っている。

> 自分は小さい頃から農業が好きだった。だから、百姓をやって苦と思ったことはない。ものをつくるのが好き。デカセギをしないで、何とか頑張れないものかと思う。

こうした「働き者」であるという特徴は、２世たちにも、少なからず受け継がれている。２世であるNo.42の男性（個人No.42）は、「デカセギ」の際の労働について、以下のように語っている。

> 最初は、ユニバースという会社。日産のギアをつくったり、フォードの部品をつくる会社。９ヶ月ぐらい。松下電器のエアファンをつくるラインの仕事。１年間。それから、運送屋。明治の牛乳を配達する。朝４時半から夜の８時頃まで。365日、毎日仕事。免許は日本で切り替えた。ブラジルで持ってたのを、切り替えた。４トンまで。２年ちょっといて、ブラジルに帰ってきた。1995年。工場の仕事じゃないから、自分に合っていると思った。気に入っていた。２回目のデカセギ。茨城で携帯電話の基盤をつくる仕事。１ヶ月。友達の紹介で、転職。長野オリンピックがあるということで、鉄道のレールの交換の仕事。ロングレールにするため。会社よりいいと思った。いろんな所に行くので。そこで、ほとんど帰るまで仕事した。そこでは、溶接の免許もとらせてもらったし、その生活を続けていれば生活もできたんだけど。そういう仕事はなくならないので。まだ、友達は、そこで仕事を続けている。一番良かったのは、トメアスーにいるみたいに、縛られない、自由な感じがしたこと。溶接したら、いくらという形でお金がもらえる。工場みたいな仕事じゃなかったので、気に入っていた。

この男性は、１年365日間毎日、朝の４時半から夜８時まで牛乳の配達の仕事をしていたが、その仕事に対して「大変だった」という言葉が使われることはない。むしろ、こうした仕事に対して、「自分に合っている」、あるいは「気に入っていた」という評価がされ、このように働くことは、当然のこととして受け止められているのである。また、鉄道のレール交換の仕事に対しても、「縛られない」、「自由な感じがした」という言葉が使われており、そのまま、日本でその仕事をしてもよかったということが語られている。この男性（個人No.42）は、先に見たように、ピメンタの値段が上がったため、農業に将来性を見いだし、結局トメアスーに帰るという選択を行った。

この男性が、トメアスーに帰ることになったのは、ピメンタの値段が上がるというある種偶発的な出来事が発生したからであった。必ずしも、最初から帰国することを前提にしていたわけではない。「農村型」の２世・３世がトメアスーに戻ってくるとは、必ずしも言えないのである。

確かに、トメアスーにおける「農村型」の２世・３世たちは、皆故郷であるトメアスーに愛着を持っている。しかしながら、農業に対する愛着という点に関しては、１世が抱いているほどの愛着を、２世・３世の世代は持っていないのかもしれない。先ほどのNo.42の男性（個人No.42）は、以下のようにも語っている。

> 日本では、仕事をしていたらお金が入ってくる。給料がもらえる。今やってる農業は大変。作物をとって、それをお金にして、労働者に払って…、残るものがあまりない。利益が少ない。あの頃の方が、良かったというか…、こちらでは、使う方だから。経営は難しい。

また、No.53の男性（個人No.53）は、「デカセギ」期間中の労働を、「きついと聞いていたが、そうでもなかった。ずっと日本にいてもよかった。」と語る一方で、帰国後、営んでいる農業については、「収入の60～70％が労働者の労賃に消える。手元に残るのはほとんどない。何をやっているのかと思うときがある。」と語っている。

このように、「デカセギ」を経験した人からは、日本で給与所得を得ることの良さが語られる一方で、トメアスーにおける農業の厳しさが語られているのである。

「農村型」の２世・３世の人たちは、基本的に「働き者」であり、日本での「デカセギ」労働に対して、それほど違和感を持っている様子はない。「労働する」ということに対して、親和的な文化を持っていると言ってもいいかもしれない。つまり、トメアスーの２世・３世たちは、円滑に「デカセギ」を遂行できる素地をもっていると言えるだろう。

こうした「農村型」の青年たちが、「デカセギ」文化に馴染み、その担い手になるということは想像に難くない。実際、日本での労働の「大変さ」と、故郷で農業を行う「大変さ」を比較した上で、日本での労働を選ぶという決断がされる場合も、数多く生じている。

「農村型」であったトメアスーの青年たちが、どのように「デカセギ」を行い、どのような「デカセギ」文化を形成してきたかということについては、トランスナショナルな枠組みから、今後、さらにその記述を豊富化していく必要があると言える。この点については、今後の課題としたい。

注

１）「デカセギ」斡旋業者の利用が減少したということについては、求人数の減少によって「デカ

セギ」斡旋業者の淘汰が進んだという事情だけではなく、「デカセギ」送出元のコミュニティにおいて、「デカセギ」に関する社会関連資本が徐々に確立されたということも、少なからず影響を与えていると思われる。

2）こうした「付き添い家政婦」の収入格差は、あるいは労働条件の差に起因するのかもしれない。実際、こうした「付き添い」は何人の世話をするかで収入が変わってくるということが、例えば、No.115の女性（個人No.115）などによって語られている。とはいえ、「デカセギ」に行った女性の中に、「日本の人」の労働市場と「ブラジルから来た人」の労働市場が必ずしも同じではないという認識を持つ人が存在するということ、そしてその語りを記述するということが、ここでは重要だと考える。

3）森（1995a）は、日系２世には、２つのタイプが存在すると指摘している。１つは、学歴を犠牲にして家業にかかわり、日本的価値観を強くもつ「日本」タイプである。もう１つは、ブラジル的な環境の中で社会化され、ブラジル的な価値観を内面化している「ブラジル」タイプである。それぞれのタイプを特徴づけると、「日本」タイプの２世は、「よく働く」、「日本のよいところがのこっている」として、「デカセギ」先の企業から良い評価を受けることが多い。一方、ブラジルで威信の高い職業に従事する「ブラジル」タイプの２世たちは、「デカセギ」は、あくまでも低い階層の人が従事するものだという認識を持っているということが指摘されている。森の分類に従うと、トメアスーに帰ってきた２世・３世たちは、「日本」タイプの２世・３世ということになるのかもしれない。

参考文献

石川雅典，1995，「出稼ぎ送出の実態と家庭・地域生活――アマゾン地区日系集団地の留守家族、出稼ぎ経験者の調査から」渡辺雅子編著『共同研究　出稼ぎ日系ブラジル人　上　論文編［就労と生活］』明石書店，585-604.

梶田孝道・丹野清人・樋口直人，2005，『顔の見えない定住化――日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会.

森幸一，1995a，「ブラジルからの日系人出稼ぎの特徴と推移」渡辺雅子編著『共同研究　出稼ぎ日系ブラジル人　上　論文編［就労と生活］』明石書店，491-546.

――――，1995b，「日系集団地にとっての『出稼ぎ』のもつ意味――３日系集団地の出稼ぎ送出形態とその影響」渡辺雅子編著『共同研究　出稼ぎ日系ブラジル人　上　論文編［就労と生活］』明石書店，547-84.

田中規子，1996，「アマゾン熱帯地域における日系協同組合の経営危機とその要因分析――トメアス総合農業協同組合を事例として」『農経論叢』北海道大学，52：181-91.

（濱田　国佑）